Medical and Pharmaceutical Society for WAKAN-YAKU

P－23

生薬の使用頻度，帰経論から『傷寒論』の用薬規範を探る

○片貝真寿美，谿　忠人
富山医薬大・和漢薬研究所・漢方薬学部門

【目的】我々は新処方を考案する基準を得るために歴代医方書の用薬法を考証している。今回は『傷寒論』の用薬規範を生薬の使用頻度と組み合わせ（薬対）と帰経論から考察した。
【方法】『傷寒論』（日本漢方協会学術部編『傷寒雑病論』）の処方を『漢方概論』『漢方処方類方鑑別便覧』に基づいて六病位に分類した。生薬の使用頻度はデータ化（Excel 2000 Microsoft）し，帰経と薬能は『中華人民共和国薬典2000年版』に従った。
【結果・考察】1．帰経：各病位ともに肺と脾胃を担う生薬の頻度が高い。『傷寒論』は肺と脾胃で呼吸と消化機能（すなわち気）を整えることを重視していることが分かる。次いで太陽病は心と膀胱，少陽病と太陰病は心と肝，陽明病は大腸と肝，少陰と厥陰は心と腎を調整する生薬が用いられている。2．太陽病では桂枝（心肺膀胱経）または麻黄（肺膀胱経）が20方中の19方（猪苓湯以外）に配剤されている。この薬対と脾胃経を調整する炙甘草・大棗・生姜によって太陽膀胱経の症状（頭項強痛など）が調整される。発汗には脾胃の機能が必要である（桂枝湯の条文）。3．少陽病は黄芩を含む薬対（半夏，柴胡，黄連）と半夏生姜の薬対に特徴がある。これらと脾胃を担う炙甘草・人参などを含む小柴胡湯・半夏瀉心湯関連処方（26／50方）で少陽胆経の症状（心下痞や胸脇苦満・結胸）の調整がはかられている。4．陽明病には大黄を含む薬対（桃仁，芒硝，枳実）と知母石膏で陽明胃経の病変（発熱・亡津液）が調整されている。また多気多血の陽明胃経は瘀血と関連するため大黄桃仁剤が用いられる（3／12方）。5．三陰病は乾姜を含む薬対（炙甘草，人参，附子：補気補陽薬）が裏寒虚証に用いられている。さらに芍薬甘草の薬対も脾胃を調整する大棗生姜と共に太陰病の腹満に用いられ（4／15方），附子（心腎脾経）と利水薬（白朮，茯苓）の薬対で少陰腎経の水滞が調整されている。
【総括】『傷寒論』の病態症状は帰経論や薬能論に基づく用薬法と関連することが判明した。今回の知見は新処方の創案指針となる。なお『傷寒論』では橘皮（陳皮）生姜の薬対や，厚朴・黄耆・川芎・地黄などを含む薬対の記載が十分でなく，これらの用法は他の医書を参照する必要がある。

NII-Electronic Library Service